

話題のスマートシティに足を運んでみた。太陽光発電が設置され、断熱性も優れたスマートハウスを購入しようということは以前から決まっていたが、家だけでなく、その場所、周囲の環境、街そのものについて考えてみたいという妻の要望に応えるためだ。確かにどの家にも太陽電池はあるし、電気自動車もたくさん走っているようだ。これだけなら他の街にもありそうだが、足を下ろし、住民同士で挨拶代わりに街のエネルギーの使い方について会話している様子を見たとき、確かにこの街は一味違うことがわかった…。

溢れる実務的な魅力

昨今、スマートシティが流行りである。スマートシティとは、スマートグリッド（次世代送電網）などによる電力利用の最適化に加え、熱や未利用エネルギーも含めたエネルギーの面的利用や、交通システム、ライフスタイルの変革などを複合的に組み合わせた、エリア単位での先進的なシステムを盛り込んだ都市のことである。日本各地でスマートシティの実証実験が企画・推進されている。新聞報道に拠れば、主要なものだけでも世界で400カ所ものプロジェクトが進行中であるという。特に新興国において、スマートシティ建設はブームである。

ではなぜ、新興国でもスマートシティがブームなのか。1つには、資源の有限性を新興国自身が理解しているからである。これから経済発展を遂げるにあたり、増加するエネルギー使用を可能な限り下げていくことが望ましい。再生可能エネルギーの利用を増やすとともに省エネを推進することで、化石燃料の消費量を減らし、エネルギーセキュリティの確保に繋がるなど実務的な意味があるのだ。

2つ目は、その建設にあたり先進国の技術を取り入れ、投資を促すことで、一気に技術的なキャッチアップが図れるからである。そして3つ目は、当該地域のブランド力を高め、地価を高めることで、土地への投資のリターンを最大限高めることができるからだ。スマートシティには、こうした実務的な魅力がある。

生活者視点のスマートシティとは

だが、それは街の建設者にとっての論理だ。そこに住むであろう住民にとっての意義とは何であろうか。スマートシティの定義にもよるが、世界中でスマートシティは建設中であり、完成形のスマートシティに暮らす住民はほとんどいない。そのために、スマートシティの住民の生の声を聞くことはできないが、昨今のエネルギーシステムやライフスタイル革新への関心の動向から、スマートシティの住民にとっての意義を考えてみることにしよう。

住民にとっての意義として、建設者は自らの論理を持ち出し、資産的価値の向上を訴求しがちだ。もっとも、永住の地とするのであれば、価格上昇による転売益の確保は意味を持たず、むしろ固定資産税の上昇がデメリットになるかもしれない。もちろん、転売の有無に関わらず、自分の土地の価格、価値が上がるということは、自分の住んでいる街が注目を浴びているということであり、気分的には悪い気はしないであろう。

ただ住民にとって、こうした意義は一つの要素に過ぎない。もっと大切なのは、普段の生活にどう関わるか、という部分であるはずだ。普段の生活、すなわちライフスタイルへの関わりとして近年重要になってきているのは、エネルギーとの関連である。それではライフスタイルとエネルギーの関係とは一体どのようなものなのだろうか。

あるべきエネルギーの姿を実現

従来、エネルギーは、電力会社やガス会社と契約し、その契約の範囲において、好きに利用することができた。住民が望むだけ、電力会社は電力を供給することが責務であるし、それに完全に答えることが電力会社のサービスの本質であった。その代わり、そのためのエネルギー供給源については、住民は知る必要もないし、電力会社も詳しく伝える必要もなかった。

福島第一原発事故は、こうした電力サービスに対する生活者の意識に変化を及ぼした。その一つが電力供給源に関心をもつ市民が増えたということだ。原発事故が起こって初めて、福島から電気が運ばれていたことを知った都民も多かったのではないだろうか。

もう一つは、自身の生活と（直接的には見えにくい）より大きな社会システムとの関連を意識し始める人が出てきたということである。従来から飲料水を気にする人は多かったが、それは健康に直結するからである。一方、原子力発電由来であろうと、太陽光発電由来であろうと使う分には違いが分からないのが電気の特徴であり、電気は健康には直結しない。しかしながら、将来世代への影響をも考えて再生可能エネルギー由来の電気を買うものなら買いたいという人が増えつつあるのである。

スマートシティには、こうした再生可能エネルギーの利用を高め、社会的にあるべきシステムを実現してくれる、そうした街に身を置けるという期待がある。

キーワードは住民同士の“つながり”

しかし、再生可能エネルギーを使うだけであれば、屋根に太陽光発電システムを設置するだけでも実現は可能である。では自宅単体で実現するだけでなく、スマートシティに住むことの意味は何であろうか。

それは、そうしたライフスタイルに共鳴する住民同士のつながりではないか。都市の近代化に伴い、“お隣さん同士”の付き合いから解き放たれ、煩わしさのない自由な生活を謳歌してきた。その一方で、隣で人が死んでいるにも関わらずそれに長期間気づかない、といった、地域における人間関係の希薄さが指摘されて久しい。

その反動からか、近年、シェアハウスに代表されるように、濃厚なコミュニケーションが求められる生活を欲する市民も見受けられるようになってきた。マンションにおいても、マンション内でのイベントを通して住民間のつながりを強化するサービス会社が人気を集めているという。

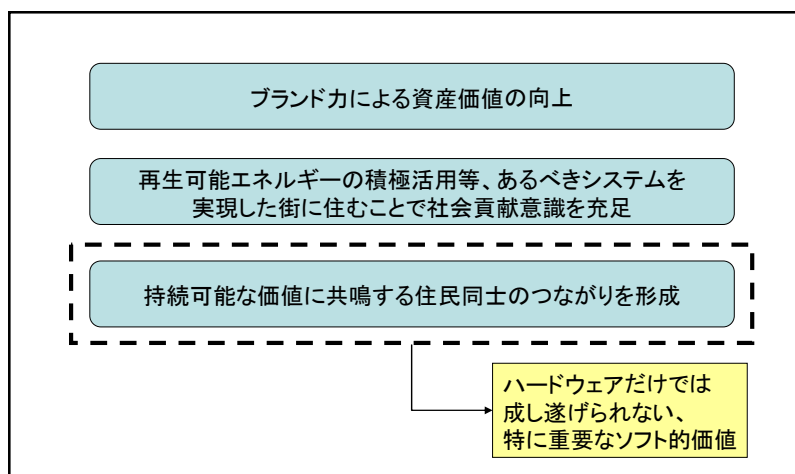
スマートシティも、その都市のコンセプトにも依存するが、その多くは住民間の連携プレーが要求される街になると想定される。再生可能エネルギーを使うということは、エネルギー供給状況に自身のエネルギー利用を合わせることが求められる。互いのエネルギー需要の調整を図ることも時には求められることになるのだ。

また交通についても、マイカーを使うのであれば他者を意識することはないが、カーシェアリングを使うことを通して、街の資産を共有することになれば、以前は気にしなくて済んだ、他者への気遣いが求められる街へと変貌を遂げることになる。

そうした隣人への配慮を煩わしいと負の側面で捉えるのではなく、住民間のつながりを促すというプラスの意味で捉えることが重要なのであろう。お互い、自身の生活だけでなく、互いを思いやれる者が集い、街を持続可能な形で活性化させていく。

冒頭で紹介したように、こうした目には見えないソフトの価値こそが生活者をひきつけ、スマートシティの価値を高めることにつながるのではないだろうか。そうした状態を作り出し維持することこそが、スマートシティにとって最も大切な要素なのかもしれない。

住民にとってのスマートシティの意義



以上